

作品について

土屋 敦資

<版画技法について>

1995年、独自の版画技法をみ出した。その技法とは山から集めてきた唐松の落葉を材料に、手作りの版画紙をつくり、これに銅版画を刷るというものである。通常、版画の支持体である版画紙は、和紙・洋紙が一般的である。しかし、自ら落葉で版画紙まで作るという特殊な方法を考えたことで、自己の表現を深めてきた。

落葉の紙に銅版画を刷る際、のりを付けて雁皮紙を挟み込みながら刷る。この方法を雁皮刷りという。作品画面の雁皮紙は薄いため、唐松の落葉の重なりあったテクスチャーが見え隠れする。たまたま糊が多かった部分は水で湿ったかのような表情を見せる。その様子はとても触覚的であり、森の湿った空気を感じさせる。

近年は銅版だけでなく、木版凹版も用いるようになった。木版凹版では木の自然な木目を刷り取り、彫刻刀やルーターを用いて掘った深い溝のインクを重厚なマチエールとして刷り取り、迫力ある画面を作り出している。

これら一連の独自の技法は、私の以前からの作品のテーマであった「自然」に一気にリアリティーを持たせた。

<作品テーマについて>

カラ松の落葉との出会いは1995年木曾の山中だった。雨上がり、路面の隅に黒ずんだカラ松の落葉が、水の流れにそって整然ときれいに並んでいるのを見つけた。その様子はとても美しく感じられ、腐葉土に含まれる水、湿った空気、森独特の匂い、そして、雨に育まれる森のイメージが頭の中で広がった。

これを何とか作品に取り入れられないか、雑貨屋にビニール袋を買いに行き、どう使うかも分からないままカラ松を詰め込み持ち帰った。そして、試行錯誤の末自分独自の版画技法として確立する事ができた。

テーマは自然の恵み。とりわけ、雨の恵み。雨上がりの森の独特のにおい、森に足を踏み入れた時に腐葉土からにじみ出る水、せめぎあうように生い茂る雑草、雑木の生命力、このような自然の情景を触覚的に表現したいと考えている。

近年は森に育つ植物を作品のモチーフに使用している。蓮、みずなら、桐、ノイバラなど。どれも生命力の強い植物である。

※ 個展の展示作品や展示風景をご覧になりたい方は、Yahooで「ギャラリーacs」を検索し、トップページの「作家」をクリックしてください。そのページの土屋敦資をクリックしていただければギャラリーacsでのこれまでの展覧会作品が画像と動画でご覧頂けます。